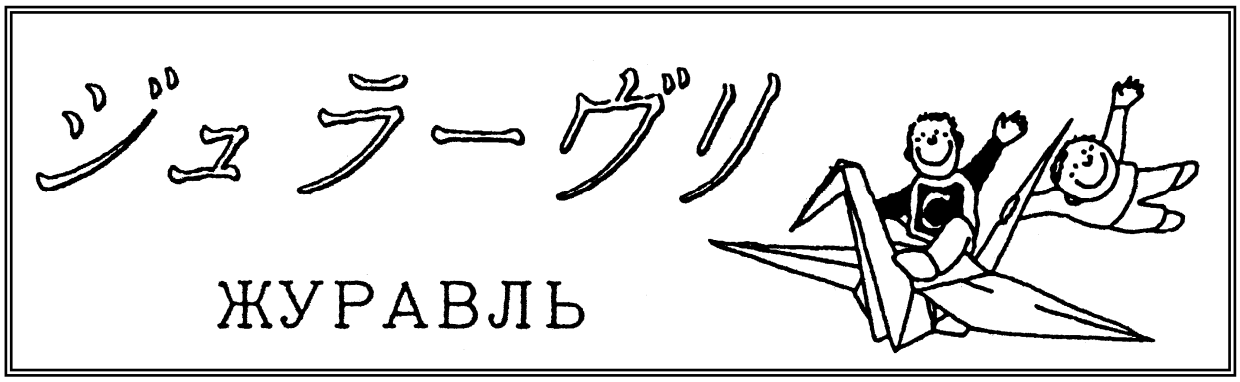


～チェルノブイリとフクシマに想いを寄せて～

「救援関西」発足31年の集い

2022 年 12 月 18 日（日）　午後 1:30～ 4 :30

大阪市立総合生涯学習センター（**第１研修室**）大阪駅前第２ビル５階

資料代：800円，学生・障がい者400円

＊プログラム＊

1.　＜事務局報告＞　今年の取り組みを振り返り　来年に向けて
チェルノブイリ・フクシマと繋がって…ヒバクシャの補償と人権確立を求める

2.　＜お話＞　菅野哲さん　福島県飯舘村民（飯舘村原発事故被害者訴訟・原告団長）

「全村避難」を生きる

～生存・生活権を破壊した　福島第一原発「過酷」事故～

3．＜歌＆演奏＞　アカリ・トバリさん　～同じ時代を生きる～

4．質疑応答（インタビュー形式）と**討論など**

バザーあり（ベラルーシ民芸品、美味しいい手作りケーキなど）

私たちはベラルーシとロシアのチェルノブイリ・ヒバクシャと、互いに顔の見える交流を続けてきました。コロナで阻まれた相互訪問の再開を期待した矢先の2月、ロシア軍がベラルーシのチェルノブイリ被災地からウクライナに侵攻しました。戦争が長期化する中、市民を巻き込んだ深刻な被害が続いています。ロシアは原発を占拠し、また核兵器使用も辞さないと公言し、新たな核惨事の危険も危惧されます。私たちは即時無条件停戦を求めます。

一方、事故後11年半を迎えたフクシマでは、廃炉作業、放射能汚染、健康・医療、賠償・生活再建、等々、課題が山積しています。政府・東電は、事故の責任を取らないばかりか、多くの国民の

反対を押し倒して、トリチウム汚染水の海洋放出方針を決定するなど被害者にさらに被害を押し付ける政策を強行しようとしています。また、医療費等減免措置見直し・廃止方針を決定するなど、事故被害などなかったかのように被害者支援打切りを進めています。その一方で原発再稼働・新増設など原発推進を打ち出しました。このような政策を許してはなりません。

「集い」では、福島県飯舘村から菅野哲さんをお迎えし、事故前の飯舘村、事故直後のこと、全村避難を強いられた村民の思いと暮し、事故から 10 年に改めて国と東電を裁判に訴えた経緯、そして故郷のこれから…等々、伺いたいと思います。私たちはどんなに困難であろうと、チェルノブイリとフクシマと繋がり、事故被害者の人権と補償の確立を求め、もうこれ以上原発重大事故を繰り返させないために活動を続けます。この一年の活動を振り返り、そして菅野さんのお話を受けて、今後の取り組みについて話し合いましょう。ぜひ、ご参加下さい！

<問合せ> 電話：072-253-4644(いのまた) , 0797-74-6091(たなか)
e-mail: cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

菅野哲（カンノヒロシ）さんのプロフィール

1948 年,戦後開拓入植者の長男として生まれる。福島県立相馬高等学校に入学。1967 年3月卒業。高等学校2年を終える春,東京の大学生が運転する自動車に轢かれて,脳出血,意識不明に、奇蹟的に助かった。大学進学を断念,家郷に帰り,農業を継ぐ覚悟を定める。飯舘村役場に奉職。農業委員会に配属。2007 年,参事兼産業振興課長。2009 年,定年退職。家業の農業に復帰。

2011 年,原発事故により福島市に 85 歳の母と妻の家族3人で避難生活。2014 年 7 月,長谷川健一団長とともに「原発被害糾弾 飯舘村民救済申立団」を立ち上げ,副団長として「申立の趣旨」文案にかかわり,組織化につとめる。福島市荒井地区に自宅を新築,福島市街の仮住居から転居。2019 年 7 月「飯舘村民救済申立団」解散。避難先の荒井地区で農業を続けている。また,飯舘村での「試験農場」にも取り組む。2021 年 3 月,国と東電に対して損害賠償請求提訴した飯舘村原告団（13 世帯 31 名）の団長をつとめている。

福島での交流会/バーリャさんと（2013.4）

荒れて草ボーボーの畑を案内してもらう（2013，7）

「飯舘村原発被害者訴訟」

菅野 哲さんの意見書

1. はじめに

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災と福島第一原発事故から早くも 10 年の月日が過ぎて、当時 62 歳の私は、73 歳になってしまったのです。この 10 年という時間は、私の人生ではどう捉えたら良いのか思いもつきません。

私は 1948 年に飯舘村に生まれ、福島県立相馬高校卒業後に家業の農業に従事し、その後に飯舘村森林組合に就職、1969 年飯舘村役場に奉職、2009 年 3 月に定年退職しました。

定年後は「父が苦労して開拓した農地を再生し、専業農家として体が動くうちは働こう。村を愛し、自らの手で地域を創っている村民の生活向上に寄与しよう。」と考え、数十種類の作物を作付けして適地作物の研究のための畑仕事を始めました。

しかし、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災と原発事故により飯舘村を追われ、現在は福島市内で妻と二人の避難生活を送っています。

何代にも亘って村民が自らの手で造り上げてきた平和な美しかった飯舘村は、原発事故による放射能汚染によって一瞬にして失われ、村民は散り散りバラバラになってしまいました。

2. 初期被曝について

事故当時は、放射能の正確な情報が無く、テレビでは当時の枝野幸男官房長官が「直ちに健康には影響がありません。」と言って高濃度の放射線量下に村民を留め、それから一月以上の後に「計画的避難」によって村民は事実強制避難を指示されました。

飯舘村民の避難は、遅れたことで避難先が見つからずに、長く高放射線量下にある村内に居住していて確実に被曝していたのですが、避難の時にはスクリーニングもなされず、線量検査もされなかったのは何故なのですか。お聞きしたいです。

結果的に、村民はどこの市町村よりも高い放射線被曝を被る結果となりました。

3. 飯舘村と村民の現状

現時点においても、飯舘村では村の 80%は除染されておりません。山も川も放射能汚染はそのままで、野山の恵みである山菜やキノコも後何百年と食べることも出来ないということです。これから先も住民は苦悩しながら生きていかなくてはならないのですよ。

必ず原発事故が起こればこうなるのだというこの現実を、日本国民に知って欲しいし、後々の代まで伝えるべきだ、と思う毎日です。

今でも飯舘村民の 8 割近くの人が避難先で暮らしているのは何故か。生業の目途が立たないばかりではありません。被災地では放射能による長期的汚染の被害が実在しているため、事故前のような暮らしが出来ないからです。国や県は移住政策ばかりをアピールし続けていますが、既存の住民の生活再建施策に取り組む姿勢を示さない限り、いつまで経っても問題は解決しません。

4. 訴訟で求めるもの

避難から 10 年を費やしてしまい、事故前のような飯舘村での暮らしはままならない状況を作り出した福島第一原発過酷事故は、如何に私たち飯館村民にとって悲惨な事故であったかを理解して欲しいと願うものです。

何十年、何百年という何代にもわたって培ってきた自分の生まれ育った飯舘村は変わり果て、美しかった自然環境は崩れ、黄金色に輝いていた田面は、いたる所で真っ黒い大型フレコンパックに埋め尽くされていますから、異様に見えて涙が出ます。

他方で、事故を起こした福島第一原発は、事故収束と廃炉に向けた事故処理が行われていますが、未だにアンダーコントロール出来ないでいる。このような危険極まりない原発を再稼働とか新設とか語る政治・経済界は、福島県の過酷を強いられている被災者の心を全く理解していないのではと思うと、恐ろしくなります。

このような状況から、私たちは国と東電が避難者に今後も被曝に対する不安を残して、安住生活を破壊してしまった責任をきちんと認める姿勢を質したいのです。

併せて、飯舘村の村民の暮らしに欠かすことのできない、美しかった自然環境の破壊と安定した社会生活を形成してきたコミュニティの崩壊を引き起こし、飯舘村で安心・安全な、そして充実して暮らしてきた生活の破壊に対する代償を求めます。

最後に

飯舘村は再生の途上にあります。しかし、一言では言い表すことのできないほどに、場所も人の心も崩壊してしまっているのが現状なのです。インフラの整備と移住政策の推進に邁進する国家政策では、事故前のような村の再生は叶わないと思っていますが、しかし、それでも長期的放射能汚染が続く飯舘村でも、安心して暮らせる生活環境が、必ずや来る日を心待ちにしているのが多くの村民の願いなのです。

事故前の長閑な田園風景
意見陳述スライドより

長年暮らしてきた我が家のあった飯舘村の光景は、毎日のように脳裏に映ります。そんなに簡単に消えることはないのです。

先祖代々から何故山村に暮らしてきたのか。それは自然の魅力があり、暮しに不可欠な自然の恵みがあり、暮らしやすい環境が整っていたからなのです。

私たちは、飯舘村という大地に根を張った飯舘村民なのです。

それを放射能によって長期的に汚染されてしまった悔しさは計り知れません。

どうか理解して下さい。

私たちは、日に日に老いていきますので、早期解決を期待しております。

どうぞよろしくお願い申し上げます。　以上

[2021 年 8 月 4 日第 1 回口頭弁論期日（配布用）を裁判のホームページ（下記）より転載しました]

<https://iitate-lawsuit.jimdofree.com/>

トリチウム汚染水の海洋放出に反対し続けましょう！

久保　きよ子

原子力規制委員会は２０２２年７月２２日の臨時会議で、東京電力福島第１原発に溜まる処理水の海洋放出計画を安全性に問題はないと結論付け認可しました。東京電力は、福島県と大熊、双葉両町の事前了解を取り付け、関連設備の工事に本格着手し、来年春ごろの放出開始を目指すとしています。

政府は、原子炉等規制法（核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律）の規定に基づき日本政府の基本方針（2021 年 4 月に公表）に照らしたとしています。 政府は、「ALPS 処理水の安全性」と、力説しますが、これは、安全に処理した水ではなく、「トリチウム汚染水」です。安全に処理した水を海洋放出するんだから大丈夫ですよ、と力説していますが、ごまかさないでください。海に放出するというのは、海を汚染する（汚染核物質を海に拡散し続ける）という問題であり、何十年にも及ぶ汚染水海洋放出がどのような深刻さを増すのか、全く未知数なのに、急いで、海に捨ててしまおうというのです。

東京電力は、「人と環境への放射線影響など科学的根拠に基づく正確な情報の国内外への発信」と科学的根拠などと言っていますが、本当は、危ういことをしでかすために科学的装いで本質を隠そうとしています。汚染水が人や環境にどのような影響をもたらすかは、解明途上であり、高い濃度では、明らかに危険であると認めています。しかし、信じられないのは、低い濃度ならば大丈夫だ、だから薄めて海に流せば大丈夫であろうという「赤信号みんなで渡れば怖くない」という危うい発想で事が進んでいる恐ろしさなのです。

慌てて海洋放出しなければならないという政府の理由について、きちんと反論をしておきます。

１．「汚染水を溜めておくタンクをもう増設できません。汚染水は増え続けており、もう溜めておくことができないので、海洋放出します。」これはウソです。

事故から 11 年経って、冷やし続けないといけない燃料デブリの崩壊熱は、下がってきています。燃料デブリ冷却のための注水は必要ありません。東電は原子炉建屋内帯流水水位を徐々に下げており、建屋貫通部からの地下水の流入もかなり減っていて、原発内の汚染水は、増え続ける峠を越えています。自然界での雨や地下水が原発施設内に入り込まないようコントロールする段階なのです。ドンドン増える状態ではないのです。

２．タンク群がひしめく所を急いで取り除いて敷地を確保しておく必要があるというのもウソです。

今後、燃料デブリを取り出せば、それを保管する場所が必要なので、空き地が必要だといいますが、人が近づけば即死するという燃料デブリをどのように取り出せるのか、全く見通しが立っていません。見通しが立っていないのにどうして保管場所が緊急に必要なのか、理解できません。

３．タンク容量は 137 万㎥が限度、来春には満水になり、もう保管できないというのもウソです。

まだまだ敷地内にタンクを増設する場所はありますし、空きタンクもあります。ウソを重ねてまで、海洋放出を進めるのか、政府への不信感は募るばかりです。

海を生業にしておられる漁協関係者の怒りに共感します。海を放射能で汚してはならないという主張は、子孫へ引き継ぐべき伝承です。反対を貫きましょう。年明けにも再度政府交渉予定です。頑張りましょう！

戦争はいやや！核なんかいらへん！フェスティバル　2022
～久しぶりの in 長居公園～

ここ２年間コロナ禍に押されて、反核フェスは室内開催でした。実行委員の方々は会場近隣にチラシ配布をして集客に努めておられましたが、参加者はほぼ仲間内ばかりで、意気が上がらんかった。今年はやっぱり屋外でやろうと実行委員会で決まって、第 38 回反核フェスは長居公園内の自由広場での開催と相成りました。大音響（実は年寄りの耳にはちょっと厳しい）の音楽に引き寄せられ、「何やってるのかな～」と公園散歩の方々も覗きに来てくれました。また、演奏する若い人たちが友達を呼んで、新しい人たちの参加があったのも嬉しいことでした。

若狭連帯行動ネットワークの久保さんの挨拶で開会。ずっと実行委員長を務められた山科さんは長時間の外出が難しく、残念ながらお顔を見ることはできませんでした。

さて、ブースの並びを見てみると…　やはり２年間のブランクは参加ブースの減少につながり、楽しみにしていた「たこ焼き」や「焼き肉」がなくなり寂しくなりました。でも、≪チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西≫のブースは、「割烹ながさわ」のとてもおいしくて安いおでん販売で大繁盛。ちょっとサービスし過ぎやったけれど、お客さんがドンドン来て、お昼のオカズに買ってゆく人もありで、大鍋４つのおでんが快調に売れていきます。おでんを盛りつける間に『ALPS 処理水の海洋放出方針再検討』の署名をしてくださいとお願いし、多くの方が快く応じてくださいました。ただ、盛り付けがチャッチャと出来ると、『医療・介護等の減免措置見直し方針撤回』署名まで説明する時間がなく、手際がよくなり過ぎるのもどうかと思う田中でした。

いつものように、ベラルーシグッズと手作りケーキもテーブルに並べ、なんかきれいなものがあるな～と寄ってくる人達に「私たちはチェルノブイリ原発事故被災地のベラルーシと交流していて、これらのグッズの売り上げは救援金になりま～す」と言いながら、何度もマトリョーシカを「この人達は５人家族でね」と並べてみせて、これまた時間をかせぎ、活動の説明に務めた次第です。

フェスティバルなので、もちろん正面のトラック舞台ではアピールや演奏が繰り広げられています。参加者向け『憲法○×クイズ』も出題され、店員をしながら聞いていると、知っているようでちゃんとは知らないことがあるのに気づかされました。

≪救援関西≫の舞台演目は毎年来てくださるダンス・コア・ポシブルの友情出演によるバレエ。今年はロシアのウクライナ侵攻により「戦争」が身近に感じられる状況で、小谷ちず子さん振付け出演で４人のお弟子さんと共に「命」をテーマに踊ってくださいました。

舞台に登場した兵士が武器を構え殺戮を重ねます。野原で遊ぶ若者や子ども達、街行く人々、赤ん坊を抱いた母親…　多くの命が奪われ、兵士自身も戦場で銃弾に倒れ、舞台には４人の亡骸が並ぶ。人々が死に絶えた荒野に、失われた命を嘆き蘇りを祈る小谷さんが登場。彼女の慟哭がトラック舞台に異空間を出現させ、見ている私たちは「命」の現場に立ち会っているような感覚に浸った。

これまでの作品では役柄の衣装をまとい、一見してその人物が分かったが、今回は全員がシンプルな白いワンピース姿、しぐさだけで表現されていた。それは、誰もが兵士でも子どもでも母親でもあり、命を奪われる者と奪う者に区別はなく、状況次第で加害者にも被害者にもなり得る。私たちは決して確固とした存在なんかではないと訴えているかのようでした。終盤、５人は立ちあがり、こちらに手を伸ばし「さぁ、あなた方はどうしますか。私たちは何をすればいいのでしょうか」と、重い問いが投げかけられた。真摯な眼差しが私たちを射るようでした。トラック舞台では踊りにくいだろうし、背景がカラフルで踊りが映えないのは、どうにも勿体ないことだと思ったのですが、いや、反核フェスでこそ「命」をテーマにしたバレエを踊ろうと来てくださったポシブルの思いが伝わってきました。ありがとうございました。

１日中よいお天気に恵まれ、久しぶりにお会いする方々とも旧交を温め、３年ぶりの屋外フェスティバルは無事終わりました。社会はのほほんとはしておれない有様です。明日からまたできることをやってゆきましょうと、荷物をまとめ帰路についたのでした。

（秋日和を堪能した　田中あ）

第 11 回　さよなら原発 1000 人集会

やっぱりアカン！ぜったいアカン！どうしてもアカン！原子力発電

第 11 回のさよなら原発 1000 人集会が 11 月 20 日伊丹ホールでもたれました。2011 年以降、もう原子力の危険性はわかりきっているのに、変わらない現状について。1000 人集会は、広い視野で！いつも新しい切り口を工夫して！人々に働きかけています。

今回は次のような内容でした。

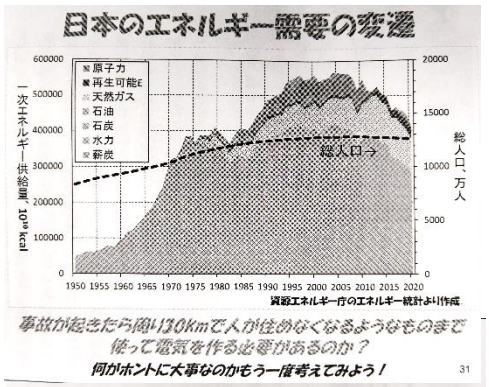
1）今中哲二さんの講演「日本の原子力と付き合って 50 有余年：なぜ私は原発に反対か」

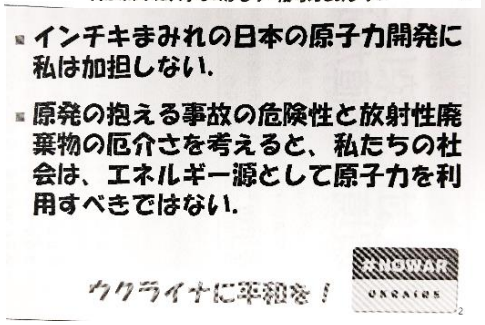
2）芸人・記者 おしどりマコ・ケンさん講演「原発事故が続いて 11 年～設備も人も劣化が進行中」

3）市民アピール①311 子ども甲状腺がん裁判(原告ビデオアピール)

②関電の原発マネー不正還流を告発する会

③ 老朽原発動かすな！実行委員会





1）京大複合原子力科学研究所研究員の今中さんの講演は、広島で生まれ育ったが「原爆は悪いが原子力は良いもの」と刷り込まれていた事、阪大工学部原子力工学科に入学、東工大大学院で原発問題にかかわり、そこで、「原発は『絶対安全』と宣伝されながら、金と力でむりやり田舎に建設されている」と「原子力開発のうさんくささに気付」き、価値観が変わった事。と、個人的なことを振り返りながら、いわゆる「生き様」を話されました。

その後は、原子力の専門家として、「20 世紀の原子力開発がしでかした不始末の数々」に向き合ってこられました。印象的だったのは、1973 年の伊方訴訟で既に、炉心溶融の危険性や 100 ㎞離れた広島市にも危険が及ぶ指摘が法廷の場で報告され、国側の主張が理論的に論破されていたこと。かつ、それでも裁判所は八百長のように国を勝たせたというお話でした。周知の方には周知の伊方訴訟ですが、あらためて、スリーマイル事故もチェルノブイリ事故も福島事故も、原発で事故が起きることは経験する前から分かっていた、そしてあの時も今も八百長が続くことに、怒りがわきました。

そして、スリーマイル・チェルノブイリ・JCO 臨界事故・福島事故・福島後の時代と、今中さんの 50 年は日本の原子力の 50 年そのものの歴史のようでした。その一つ一つの資料が、本日のテーマ「なぜ私は原発に反対か」の結論、「原発の抱える事故の危険性と放射性廃棄物のやっかいさを考

えると、私たちの社会は、エネルギー源として原子力を利用すべきでない」が示されています。

2）おしどりマコ・ケンさんのお話は、むちゃむちゃ歯切れよく（しまった！録画したらよかった）直接聞いてもらいたかったです。原子力のことに触れるだけで、芸能界を干されるリアル！（これが一番ひどい）。そして、粘り強く毎回東京電力の定例会見に参加していることは、すごいことです。

マコ・ケンさんのお話の、農民連の交渉のことはネット以外では初めて聞きました。被災地の農家は、農産物の風評被害のことだけでなく、農民自身のヒバクについても交渉を続けているという事でした。農林水産省は、農作物の安全は管理するが農民は自己責任という返答で、農地の線量測定を一貫して拒否、「手を洗って鼻をかんでください」の指導に終始・・・どこかの政府交渉を思い出しました。

もう一つ、（電通のしていることを調べる研究会）「電通研」は面白く聞き、そしてぞっとしました。あの「電通」が 311 直後から政府に高額で雇われて、復興庁・環境省の意向にあわせ、「取材誘導」「報道誘導」を仕事として事業として今も活動していることが分かりました。知らぬうちにすごい専門集団により世論が操作されている。そして気づかない・・・。

マコ・ケンさんのケンさんは長居公園近くがご実家だそうです。ぜひ、また来ていただきたいですね。（由美）

＊＊＊

カンパ・会費の納入ありがとうございました！

（2022.10.13~2022.11.26）

金子龍太郎　田原良二　井上和歌　原長生　徳井和美　北川恭子　村田三郎　染木富美代　折口晴夫　碧海宏　藤田達　宗泉寺/旦保立子　小牧正子　大平文昭　ダンスコアポシブル　辰野純子　須藤光郎　原発の危険性を考える宝塚の会　田中章子　（順不同・敬称略）

演劇「精神病院つばき荘」を観て
脚本：くるみざわしん

演劇「精神病院つばき荘」を観てきました。

「日本社会から切り捨てられた人々がベッドを埋める精神科病院―その暗部を描いた演劇（パンフレットより）」。そこに「2 つの問題に共通性を感じる」「原発問題」が絡みます。

登場人物は精神科の医師・看護師・患者の三人だけの劇です。

「この病院は注射の上手な人（看護師）から辞めていきますな。」しょっちゅうある採血が苦痛という、患者のこの簡単な質問に誰も答えない。聞く権利もない。病院への要望・もちろん退院・転院・移動の自由もない。数十年の長期入院が当たり前。病院はそういう患者で経営が成り立っている。

一人前扱いされないのが日常の中で「精神病院であっても原発事故時の対策が必要」という当たり前のことを言うと、大変な事に発展していく。世間の外圧・経営の外圧・院長のストレス・切れた（吹っ切れた？）看護師。その中で明らかに一番まともな患者の言葉。そして、本当に起こった原発事故。みんな狂っていく世界。

「うんうん、分かりますよ。うんうん、あなたは考えなくていいから」。あまりにリアル（もっともらしくてひどい！）で笑ってしまう医師のセリフや、注射が下手な看護師のキレッキレの啖呵等で引き込まれ、あっという間の 2 時間でした。

そうや！

障がい児・障がい者・精神科医療の中で、いやいや普通の病院の医療の中でも、「医療の前に当たり前に経営を考える」「患者さんの人権これでいいの？」「私は優しそうな言葉をかけつつ加害者？」と思ったことを思い出しました。

「見ない、考えないことで生き残ってきた私たち」というセリフに、精神障がい者への人権侵害の文化・原発や米軍基地・戦争の問題・自らも加害の片棒を担ぐことになる、いや、すでになっている葛藤、怖さを考えました。

「私たちはとてつもなく大きなものに見放され、見捨てられている」このメッセージは何か？・・・・考えながら帰りました。（由美）

今年も他グループと一緒に関電に申し入れをしました。関電は相も変わらぬ横柄な態度で、申し入れを５人・５分と制限し、５分の時間がくればイライラ。なんの誠実さもない対応に終始していました。
「救援関西」は、下記の申し入れ書を渡しました。（猪又）

2022 年 10 月 26 日

関西電力株式会社取締役代表執行役社長　森 望 様

１０．２６ 反原子力デーに際しての申し入れ

「チェルノブイリの惨事は、人々が土地に根差して築いてきた習慣や伝統を断ち切り、家族や友人との関係を大きく歪め、社会全体を揺り動かしたのです。この変化に翻弄されたチェルノブイリの被害者は、苦悩や試練の日々を過ごしてきました。」チェルノブイリ事故のために移住せざるを得なかった事故被害者の言葉です。

それはフクシマ事故でも同じです。事故後 11 年半を経てもなお原子力緊急事態宣言は続き、問題が山積しています。事故の収束・廃炉作業は困難を極めています。帰還困難区域が未だ存在し、避難生活を余儀なくされている人々は３万人にも上ります。広大な地域に広がった放射能汚染により、ヒバクをさせられたことに伴う健康不安は生涯続きます。健康権、生活権など基本的人権は侵害されたままです。その上、政府・東電は、トリチウム汚染水（ALPS 処理水）の海洋放出を強行しようとしているのです。このような原発重大事故による惨劇は二度と繰り返してはなりません。

貴社は公益事業者であるにもかかわらず、地元業者と癒着し、多額のお金をばらまき、原発を維持・推進してきました。今、岸田政権は「原発回帰」を打ち出していますが、それは無理難題であることは原発に依存してきた貴社が最もよくご存じのことです。安全をおろそかにし無理やり原発を強行運転すれば、それはさらなる重大事故の危険を高めます。また処理・処分が出来ず行き場の無い使用済み燃料＝核のゴミが溜まり続けます。原発依存体質に終止符をうち、すべての原発を止め、再生可能エネルギーに転換すべきです。

下記申し入れします。

１．高浜 1 号は運転開始 48 年の国内最古かつ原子炉圧力容器の中性子脆化が最も進んだ危険な老朽原発です。運転開始 47 年の高浜 2 号、同 46 年の美浜 3 号と共に 40 年超運転を断念し、廃炉にして下さい。

２．配管のひび割れや蒸気発生器細管の減肉など老劣化の進む高浜 3・4 号と大飯 3・4 号を廃炉にして下さい。大飯 3 号で強行しようとした「次回定検までのひび割れ放置運転」を二度としないでください。

３．むつ市への使用済燃料の中間貯蔵押しつけを断念し、使用済燃料をこれ以上生み出さないで下さい。
貴社による「福井県外での中間貯蔵施設立地」の約束、すなわち、①2010 年まで、②2018 年中、③2020 年末まで、のいずれも実現できず、運転停止などの約束を反故にしました。④2023 年末までが現在の約束です。「４度目の正直」として、これを守れない限り、すべての原発を運転しないで下さい。

４．高浜３・４号でのプルサーマルを即刻中止し、大飯原発にプルサーマルを広げないで下さい。
プルトニウム利用を断念し、これ以上、MOX 燃料の発注・輸送・輸入をしないで下さい。
六ヶ所再処理工場の閉鎖を日本原燃に求めて下さい。

５．「福島賠償費・原発関連費の今年度分約２８８億円（一般負担金「過去分」１５６億円/年と廃炉円滑化負担金１３２億円/年）」を託送料金に加算して回収するのをやめ、電気料金を下げて下さい。

６．取替や廃炉による美浜・大飯・高浜原発の蒸気発生器３３基をはじめ給水加熱器や核燃料輸送・貯蔵用キャスクなど大型放射性廃棄物の輸出、海外での溶解・再利用の計画を断念し、密閉管理し続けて下さい。

７．東京電力の事故責任を認定した最高裁決定を受け、原発依存の経営方針を「脱原発・脱石炭」、「再エネ拡大」へ大転換して下さい。　以上

＝ジュラーヴリ129号・目次＝

p.1・・「救援関西発足」31 年の集い/案内
p.3・・「飯舘村原発被害訴訟」菅野哲さんの意見書
p.5・・トリチウム汚染水の海洋放出に反対し続けましょう！
p.7・・戦争はいやや！核なんかいらへん！フェスティバル 2022
p.9・・第 11 回さよなら原発 1000 人集会
p.10・・演劇 精神病棟「つばき荘」を観て
p.11・・10.26 関西電力への申し入れ
p.12・・目次等

政府・与党は原発運転期間について、審査等で止まっていた期間を除外し、その分を運転期間に加えて延長する。しかもその運転期間の規定は「原子炉等規制法」から原発推進の経産省所管の「電気事業法」で新たに定める。そして、そのための関係法の改正案を来年の通常国会に提出すると報じられた。

あのフクシマ事故を教訓として決めた「原則 40 年で廃炉」を守るべきである。それを、まるでなかったかのように、例外的に認められている 20 年延長の上に、さらなる運転延長を目論んでいる。決して許されることではない。フクシマ事故を繰り返してならない！（m）

ニュース発行：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

連絡先：〒591-8021　堺市北区新金岡町 1-3-15-102　猪又方
Tel：０７２-２５３－４６４４
e-mail: cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp
郵便振替　：　００９１０－２―３２７５２
口座名　：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西